

同窓生第三期 (昭和七年以降)

少女誘拐事件の新聞記事と先生

(昭、七、糸) 大木 定雄

製糸科の二年生になると間もなく校外実習のクジ引きが始まる。誰しもできるだけ遠くて、楽な工場が当たることを願ったものだった。私の当たったのは上田市より電車で三十分と云う一番近い丸子町の列工場であった。約三〇〇名の女子工員がいて、この町としては一番大きかった。初めての実社会での働きであるので、嬉しいと云うよりは不安な気持ちがあきだつた。昭和四年のこと、世の中は不景氣、中でも製糸界は生糸の大暴落の翌年だけに、殊の外ひどいようであつた。当時の校外実習はただ働くと云う外に、工場の人に好感を与えなければ卒業の時の就職に影響した。学校の世話で就職する身の私にとっては殊の外心配で一生懸命に働いたものだ。この実習の終り頃、学校から実習振りを視察に先生も来られた。工場主の批判は悪くもなさそうで、まあ及第点はもらえるものと想像し、一安心と云うところで、二十日間の実習を終えた。

次に揚返仕上は一カ所で行なわれている依田社と云う工場に移った。この町には当時二〇工場もあったと思う。夜ともなれば、あの狭い町は女子工員で一杯であつた。小さな町として話題も少な

く猫一匹出ても明日の工場では話の種になる状態であつた。この揚返工場に来てからは、実習は一週間程の短期間であることと、学校からの実習状況視察も終つたと云う気持ちの軽さが私を浮きたせていた。ある時一人の少女に「今晚活動に行かないか」と誘つたら喜んでつきあつてくれた。当時専門学校を出た人はこれ程沢山ある工場の中で僅かに三名だつた。今の世の中では想像もつかない程少ない状態なので、実習生と云うと中々もてたものだった。夜、町を一廻り散歩すると明日は歩いたコースは勿論、時間までもがはつきりする有様、こんな風なので活動館に少女と一緒に入つたと云う噂はたちまち広まつたらしい。二、三日して実習も終え帰省した。

夏休みも開け、新しい希望に胸ふくらませて学校に帰つて見ると、地方版とはいえ、朝日・読売新聞に「大木定雄少女誘拐」として大々的に取扱われているではないか。長い夏休みを過ごした頭には自分の行動と新聞記事とが直ぐには結び付かぬ様であつた。私の帰校を待っていた学生課からは早速呼びだしが来た。就職担当教授からは大目玉を食われ、挙句の果「就職の世話は一切しない」と見放された。学校からの就職をあてにしていた身としてこんなショックはなかった。思わぬ事態にすっかり悲観していた私に、今度は学生課より針塚校長室に向向けと云う達しが来た。

初めて入る広い校長室、口髭の校長の顔は異様に恐ろしく感じた。この時針塚先生は「将来社会に出たら女子を使う身であるから行動は充分注意するように」と一言云われただけであった。退学を覚悟して校長の前に立たされた私は急に力が抜けていく様な気がした。この針塚校長の温情ある言葉は未だに心にほのぼのとした暖味を残している。

独立独歩より生きる道がないと覚悟した私は、自炊していた借家の一室にモーターで回転するように改造した足踏機械・工作道具一式・直流発電機・小型ボイラーまで買い込んで教練・演習・見学旅行の時間一切をサボルことにして、自動機の勉強に打込んだものだった。こんなことがあって自動機の特許も出願し、又卒業論文は「自動機に関して」と云うことにした。怪我の功名とはこのことであったが、苦しい時は先生の一言を思い浮べて自分を励まし元気づけていた。

話は前に戻るが活動見物をした少女は仲間からあれこれ噂の種にされたのを苦にして、無断で帰省して居たとのことであった。噂は噂を産み偶然私の帰省と時を同じうしたことから重大化したものであったらしい。

幸い就職は学校に助手として残ることによって解決された。この助手生活二年二カ月にして群馬県工業試験場に勤務することとなり、千曲会支部の関係で渋川に帰省された針塚先生とは度々御目にかかる機会に恵まれていた。なお先生は学生を講堂に集めて

渡辺薫美氏を紹介されて「忍終不悔」と云う言葉を私達に教えられた。学生時代にはこの言葉は大した感銘も受けなかったが、研究が挫折した苦しいとき、ふと先生の温情の言葉とともに私をばげましてくれた。

又先生からは私に「奔輪不鏽流水不氷」と大書して頂いた。この言葉も「忍終不悔」とともに私の座右の銘として苦しい時を切り抜ける偉大な力となっている。

(農林省蚕糸試験場技官)

一生を貫いて実践している御教訓

(昭、八、蚕) 清 水 洗

偉大な感化 初めて先生の訓話を聞いたのは、昭和五年四月母校入学式の式場であった。巻紙に筆で書かれた原稿を持たれ、明快に要領よく話され感銘が深かった。先生は一年生の修身を受け持たれ、毎週不曜日に一時間宛、一年間講義をされたと記憶している。

先生はいつも巻紙に書かれた原稿を持って授業に臨まれた。くわしい内容については忘れたことが多いが、今に身に沁みていることは、東洋人には東洋道徳があると言われ、特に中国の儒教については熱心に講義され、日本人が東洋人としての自覚を忘れて祖先の作り上げた思想道徳を顧みないことは誠に遺憾である。現在欧米人は盛んにこの方面の研究をし、よいものをとり入れてい

る。今に日本人は欧米人から英語で四書五経を教わる時代が来ると思うが、困った傾向であると歎かれたことがあった。先生は最も多く論語を引用して説明教訓された。

先生の愛好せられたものの二、三をあげれば、「子曰く君子は義に喩り、小人は利に喩る。」「子曰く君子は坦にして蕩蕩たり、小人は長へに戚々たり。」「子曰く君子は和して同せず、小人は同じて和せず。」等々私のメモに記され、当時の先生の面影が彷彿と目に浮んで来てなつかしく思う。又或る時は「感予異に出ず」又は「感予出ずれば異なる」の意味につき述べられ、若い私共をいましめられたこともあった。以後私には何か見えざる力によって漢籍を座右に置く習慣が未だに残っていて、時折目を通すことがある。偉大なる感化力の持主であられた。

校長室 入口に「たたかないでお入り下さい」と貼り紙されてあった。夏はドアを開放されて何処からでも先生の御在室を知ることが出来た。常にこうしてガラス張りの中に生活されていたことも、先生の日常生活が正しかった一端を示すものである。

スポーツ 先生はスポーツを奨励されたが、殊に武道と登山には格別御熱心であった。寒稽古には、いつも、金山町（後に新参町に移られた）の御宅から徒歩で、出張されない限り必ず出席され、真冬の寒い朝、畳の上や板の間に正坐され二時間近く練習を見て居られた。確か五時から七時までであったと記憶している。先生は柔道をおやりになった関係上、寒稽古もそちらの方に居られることが多かったが、剣道部には先生と同様に熱心な和田仙太

郎教授が出席せられていた。又登山を奨励された。全国から集まって来た学生に、信州へ来たのだから、山へ登れとすすめられた。先生御自身も登山をされた。登山訓も早くから出来ていた。学生はよく山へ行ったが、事故を聞かなかった。

先生は心身の鍛練は青年時代にやることで、その為には全員が誰でもやれるスポーツに重点を置かれた点は、今の世の中でも大切な考え方であると思っている。

人との応対 先生は人を選ばず誰とでも気軽に親しく話をされた。他人に対する思いやりは、人一倍深かった。又物質的には極めて淡泊であられた。私的生活については全く心を配らなかったように見られた。

揮毫の求めに 先生は多方面の人から揮毫を頼まれたが、気軽に求めに応じて先生の御理想の句を書いて与えられた。又学生には各人に適した処世訓を書いて下さった。古来名士の書には偽筆も多いとか聞いているが、先生に限ってそうしたことは絶対になされる方ではなかった。

青年を愛された 先生は殊の外、青年を愛された。学生はいつも遠慮なく先生の御宅へお邪魔にあらり一日遊んで帰った。いくら大勢で、お忙しい時でも、いやな顔をされたことはなかった。お訪ねすると客間に通し何か話をして下さった後、「私は仕事があるから、君たちはあちらの部屋で遊んで行き給え、他にも学生が来ているから」と菓子や季節の果物の用意された別室へ案内されると、遠方から来ていた学生達は、父母の許に帰った様な家庭

的雰圍氣を十分味うことが出来て、大喜びであったと聞いている。中にはお菓子を食べたくなったら、先生の家を訪ねればよい等と云っている者もある位、親しみ深い先生であった。

手紙 先生は実に几帳面な性格の持主であられた。先生に手紙を差上げれば、必ず返事がいただけた。代筆などは全く無く毛筆で達筆に書かれた先生のお便りを拝見すると、社会生活上正しい手紙がどんなに大切かを無言の中に教えられる様な気がした。誤字や誤った手紙の書方に対しては朱を以て御訂正になり、本人へ送り返して反省を求められた。私は先生の教を今も実行し手紙ももらった時には必ず返信することを続けて来ているが、これも全く、先生の身を以てのよき御指導によるものと感謝している。

寛なれば人を得 先生は性温厚ではあったが、内には強い信念をもたれ、よいことはどんどん実行された。先生の御理想は、「寛なれば人を得」「君子は人を器にす」を実践された。従って開校当時信州の田舎町にあれだけの立派な教授陣を集められたことは、全く先生の偉大な人間性によるものと思われる。先生は学者でなかったが、学界の動向には深い関心を寄せられて居られたことは、お話の中にそうした話題に時々触れられた。

共産主義には反対 二年生の時に菅平に庇宇亭という山小屋を建てる際に、先生も日本式の家を並べて建てられたが、ほとんど先生は利用されずに開放されていた様であった。先生は酒は余り多く飲まれなかったで、ついぞ一回も先生の酔われた姿を見たことはなかった。然し煙草は非常に愛好されていた。先生は共

産主義に対しては反対の態度を示された。「財産は祖先の苦心によるものであるから、これを平等に分けるという考え方はいけない」と申された。

学生を紳士として扱う 先生は学生に対しては細かい世話をやかず入学式当日紳士として取り扱うと訓示され、学生を信頼されて自主的活動を奨励された。しかし或る時学生がよくない処に出入りしていることを聞き、先生自ら巡視され、その事実を知りその学生をなぐって、その不心得を諭されたことがあったと聞いている。中国の言葉に「その民族を亡ぼさんとせば、先ずその史を絶て」とありますが、先生は常に「故きをたずねて新しきを知る」の態度を以て、臨まれた。

真の技術者養成 先生は終始真面目な生活態度の専門技術者の育成に一生をささげられたと云っても過言ではないと思います。今日の言葉で申しますと、健全なる民主社会を建設する一員になることと、生産性の向上に役立つ技術者の養成に力を注がれたのであります。当時我が国として国民経済に最も関係の深かった蚕糸業に最善の努力を払われたことは当然と考えられます。世は移り、母校も大きく転換しましたが、先生もし御在世ならば、必ずや現在の姿を喜んでいただけたらと思います。

終生実践を期している御教訓 顧みれば既に三十年の昔、思ひ出はつきず、私が今日こうして曲りなりにも健康で微力をつくして社会に益することを願って働いて居ることの出来るのも、先生の御陰と感謝している次第である。なお私が今日まで一貫し

て実践している先生の御教訓は、

一、「正しく生きること」「進んで難局に当り、身を挺して事に従え」を胸にいだいて努力する。

一、手紙をもらったら必ず返事を出すこと。

一、漢籍に親しむこと。

一、山に登って浩然の氣を養うこと。

などである。

先生逝いて十二年、今も母校の庭の先生の胸像は常に私共をあたたく見守って下さっています。先生は学生をよく覚えていられるので、私が書いたことの中にもし誤りや失礼な点がございまして、お前は頭が悪かったから忘れたな、と笑って御許しを御願う次第であります。
(長野県上田千曲高校教諭)

自己を持するに厳・人を遇するに寛

(昭、八、糸) 荻原 行雄

針塚先生は、新島讓先生や荒木寅三郎先生等と共に群馬の生んだ偉大なる教育者の一人である。

蚕糸業の勃興期に当り上田蚕糸専門学校が創立されるや初代校長として着任され、爾来二十有八年間学校発展のために尽力せられ、その間先生に教えを受けた人達は、今や全国に亘り蚕糸業

界は勿論、産業・経済・教育其の他各分野に活躍されている。先生の残された業績は誠に大きく、母校と共に永久に残るであろう。

先生は退職後郷里にお帰りになり、晴耕雨読の生活をなされておられたが、この間群馬県選舉管理委員会委員長などの公職にもつかれた。そんな関係で郷土の人々との繋がりもあり、中年以上の人はよく先生の御名前を存じて居り、親しまれ尊敬されていた。先生の襟嶺の書は額や掛軸となって郷土の学校や公民館などに今なお掲げられている。我々がたまたま生徒の家庭など訪問する時、思わぬ所で襟嶺と書かれた先生の掛軸などを拝見して驚くことがある。私も宇宙の四大美を書いた先生の書を掛軸にし、時々床の間に掲げ往時を追想している。先生の書体は豪壯闊達であってよく先生の性格が表われている。

先生は能筆であるばかりでなく、実に筆まめであった。在校中実習先などから手紙を差上げると、必ず直ぐ自筆で返事をくだされたものだ。

先生は見栄を張ったり、気取ったりすることがなく、誰れとも気さくに話された。先生が在職中たまたま同じ汽車に乗り合わせたことがあった。先生は農家の老夫婦と打ちとけて四方山話などしておられた。謹厳に見えてもくだけた一面もあり、ユーモラスの所もあった。

私が在校中先生の御宅を訪問した際なども、何時もにこやかに迎えて下さった。南画なども教えていただいたことを覚えていいる。御家庭でも時々冗談を言い実に和やかであった。

処世訓

先生は率先陣頭主義で寒稽古の時などは、新参町のお宅から嚴寒の折にもかかわらず、毎朝よく御通いになられた。寮に居る我々よりも時には早く来られて、板の間に正座されている先生を見て恐縮したことも度々あった。

一年生の夏番飼育実習の時、余り暑いので部屋一同裸で給桑してしていると、突然校長先生が廻って来られ、同室の山本金之助君（糸二〇）（現中央工業取締役工場長）の背中を叩き、「好い身体だなあ」、彼は「よせやい」と振り向いた途端、校長だったので驚いたこともあった。

先生の修身の時間なども、古語を引用したり、事例を挙げてわかり易く話されるので左程窮屈には感じなかった。先生の話には不思議と人をひきつけるものがあった。

先生は自己を持することに敵で人の非行をせめること寛であった。私が寮生活をしていた頃、部屋の一と東洋軒で飲みあげ、意気揚々と出て来た途端、校長先生に出喰したことがあった。先生は見えて見ぬ振りをして行かれたので、却って恐縮した。

先生は無慾で高潔であられた。政界にも出ず、産業界にも特別な関係を持たず、一生を産業人の育成に尽くし、「至誠一貫」を「実践躬行」された方である。

（群馬県蚕糸高校教諭）

（昭、八、糸） 山本金之助

私は在学中二年まで修己寮に、三年になって同僚五人と常入の大神宮隣の元川上医院に下宿することになった。此の医院の未亡人と大神宮の前の「関三」と言う文房具店の奥様は、姉妹の関係であったので、時折「関三」にも立寄る機会があった。卒業式も間近かに迫った昭和八年三月上旬のある日、「関三」の御主人と話をして居った時に、私が「針塚校長先生にお願いして記念の軸を一本書いて欲しいが」と漏らした処、「関三」の主人が「以前にも私がお願いしてあげた学生様があるから、私が校長先生の処へお願いに連れて行ってあげる」と言うことで話が決まったのです。

処が常日頃校長先生は一週一度一時間本館の二階大講堂で各科合同の修身があるのみで、それも公務のために欠講が多かったし、今の学生の様な心臓もなかったし、先生と言えばおそれおのいて居たのである。三年間に校長室へ入ったのは恐らく二度位しかないと思う。そこで或る晩「関三」の御主人に連れられて新参町の御宅を訪問した。緊張したものである。二階に案内されて待つて居ると校長先生は和服姿でお出になった。そこで要件を話して貰った処「よろしい、書いてやろう。卒業後に送ってやる」とのことでしたので絹本を御渡しして喜んで帰宅したわけである。卒

業して四月一日片倉製糸紡績株式会社紀南製糸所（和歌山県御坊町）に入社したその年の十月頃と思うが、校長先生から直接送って参りましたので、早速開いて見た処、論語の一節が、読み方から解釈まで丁寧に認めて同封して下さいました。嬉しさの余り何時の間にか覚えて暗記する様になってしまった。私は早速実兄に依頼して表装して貰い、只今は家の床の間に掲げて処世訓として毎日自分をいましめつつ、故針塚校長先生の温容に浴して居る様な次第です。

先日（三十六年七月二十八日）も母校の荻原先生が諏訪千曲会の臨時総会に御出席になった折、この話を申し上げ、全文暗誦したところ「君よく覚えて居るぢやないか」と褒められたので嬉しくなり、今もなお先生を敬慕申し上げている氣持を、追想録に載せて貰いたくなり、拙文を認めた次第です。終りにその揮毫して頂いた語句を次に掲げます。

儉、美德也過、則為僇客、為鄙薄、反傷雅道、讓、懿行也過則為足共、為曲謹、多出機心、

（中央工業KK取締役）

針塚先生を憶う

——最後の汽車旅行——

（昭、八、蚕） 中 島 真

南画の教え 私は昭和五年養蚕科に入学したものであるが、

その翌年夏頃から同級生の故原治夫君に誘われて、松原町の針塚先生のお宅をお訪ねするようになった。名利に淡泊な先生の御生話は、文字通り簡素そのままで、ノブ子夫人の家計きりよりも並大抵ではなかったようだ。奥様がそれを先生に訴えられたことを耳にしている。

「現在でさえこんな経済状態で、一体退職なされたらどうなさるのですか」

「その時は上州の郷里に帰って百姓するさ、その時は妻のお前は田植えを手伝うのだ」

と申され、奥様のお言葉と先生の爆笑とが、こもごも至ったことを思い出す。当時先生は正村竹亭画伯の画風に傾倒され、特別の支障ない限り、毎月曜日午後七時頃から、自邸で竹亭画伯から、南画の稽古を受けていられた。私も先生のお奨めで、これに加えて頂き、先生御夫妻の外に若林市郎・原治夫君の五人であったが、後に配属将校出田剛介先生も加わった。竹亭先生から四君子（蘭竹梅菊）のお手本を頂き、約二時間稽古の後、いつも先生を囲んで茶菓のもてなしを受けながら、先生中心の座談が始まる。時にこれが未明に及ぶこともあった。南画の先考についての四方山話、遺蹟に関する説話等、諧謔を混えての漫談は、実に生きた教育であった。私が蘭を書くことの難かしさをなげいた時、先生は

「南画の上達には先ずその人格を磨くこと。ここに南画の尊さがある。四君子中蘭を大抵に書ければ、その他のものは何でも書

ける筈だ。昔から蘭書き三年と言つて、一番難かしいのだ、根気が大事」

と申され、更に鄭板橋の露根蘭のお話をして下さった。先生はこの世を去られるまで、四君子を書き続けられたのである。

私は不思議な御縁で、結婚のお仲人をお願いし、長男弘の御命名を賜わり、更に結婚記念に竹亭先生の南画屏風一双と、これに針塚先生の賛を頂いた。これは私の何にかえ得ない家宝として年一度は必ず虫干をして、先生の御高德を、しみじみとしのび味わつて居る次第である。

戦地から帰つて 昭和十九年五月応召して満州牡丹江から北ボルネオ戦線と、満二年の苦戦後、二十一年四月末帰還することが出来たので、このことを直ちに手紙で先生に御挨拶したのであつたが、先生からは枯れた墨痕の心の籠つた御返事を頂いた。

拜啓此度は無事ボルネオより御帰還なされ候由慶賀無量の次第是以上のことは無之候御家庭皆々様の御喜びさぞかしと御察し申上候征途数年に亘る御苦勞も今日の状態となり国民殆ど飢餓線上に彷徨する情なき次第思へば実に無謀の戦争を始めたものとの洵に遺憾なる次第に候（中略）何卒貴君の任務としては村の自覚薄き軽佻自我主我の青年層に呼び掛け覚醒指導せられ度様御願御期待申上候（中略）小生は無事なるも此頃は脚力大いに弱り歩行も甚だ困難に被感申候（中略）昨年は不幸続きにて弟幸平、妹なを、末子貞子、都丸晴治が死去し一年中病人だらけにて病院通ひを致居候今年は無難に過し度ものと考へ居候

小生は運を天にまかせて心氣頗る超然たるもの有之候
葉根譚にある

石火光中争^レ長競^レ短幾何光陰
蝸牛角上較^レ雌雄雄許大世界

の氣分に御座候生死眼中に無之候（下略）

紳々として慈愛に溢れ後進を激励され、世を戒められたお手紙である。当時私は引続き蚕種協同組合高水社の技師長の職にあつたので、関東所在の分場出張の途次、よく先生をお訪ねして、その都度貴重な御教訓の数々を頂く機会に恵まれた。

宮沢翁頌德碑除幕式 高水社創立發起人会長の宮沢貞助翁の

頌德碑を建立することになり、碑文の撰者を針塚先生にお願いすることに決定し、私はその建設委員と同行、二十三年二月十六日渋川の先生邸をお訪ねして、篤とお願ひし御快諾を得たので、この計画は頗る順調に進められ、四月二十六日除幕式を挙行する運びとなった。先生の御光臨を委員会からお願ひし、私も委細を尽くしてお願ひ申し上げたのであつたが、四月十九日付のお手紙により、参列不可能の御申越しを頂いた。

拝参したきは山々に御座候へども汽車の混雑と排水の頻繁なるには混雑の汽車にては如何とも難致に付折角の御好意に背き残念至極でありますが欠席させて頂きます。

私は熟慮の結果單身渋川に赴く決意をして、その旨予め手紙で御連絡し置き、四月二十四日急行したのである。そして私から改めて御懇請申し上げたところ、即座に御快諾されたのである。その

日にお邸に一泊翌二十五日早朝お宅から都丸ふぢ枝様に見送られて
渋川駅発、高崎乗換えて長野に直行した。汽車も割合に混雑せず、
車中いろいろのお話を承り、その日の午後四時長野駅に到着し、
午後五時近く拙宅に到着することが出来た。先生のお好きな「そば」
を母が手打ちして差上げたところ、大変なお喜びで何杯も召し上が
られたことを、家内中で今尚懐かしく語り合っている。明けて二十
六日朝から快晴、先生は御洗面後拙宅の庭内石の間に咲く蘭の花一
輪を手折られて、私に用紙と硯箱を求められた。私は奉書紙と硯を
差上げると、先生は墨痕鮮かに蘭化一輪に次の賛を添えて、宮沢家
に差上げよ、と私に渡された。

石ふみの影にたくひて宮沢の徳の流れは永却に絶ゆまじ

当日の除幕式は頗る盛大に予定通り運び、先生の御臨席は大きく
光彩を放ったのである。その夜は湯田中温泉に一泊、翌二十七日
に永井真吉君（蚤一八）宅に一泊された。

二十八日は午後四時から須坂町松ヶ枝亭に於て、千曲会北信支
会主催の先生歓迎会を開いた。定刻相会する者三十有余名、私が
受付係として会費を徴集していたところ、中年の卒業生が「俺は
宴会で会費を取られたことはない」と言うから、私は「今日は針
塚先生の歓迎会ですから、参加卒業生は全部会費を出すのです」
「そうか」と言つて会費を出された。宴会は中沢忠（糸一故人）
支会長の開会の辞に次いで、先生は御不自由な体を末席に運ばれ、
辞を低うして次の御挨拶をなされた。

自分は永い間上田で御厄介になりその後故郷に帰つて余生を

送つておるが、本席は親しく諸君に会うことが出来てこの上も
なく喜んでゐる。諸君に先生と呼ばれても顧みて何等為すこと
もなく、年を加えたに過ぎない。恥入つておる。敗戦によつて
日本は再建されねばならないが、このことは偏に諸君の双肩に
あると言つてよい。老骨としてはもはや何等力にはなれない
が、その分まで諸君に努力してもらふ以外に道はない。御参考に
なるかどうか判らないが、老子の一節をお伝えして諸君の前途
を祝福し本席に対するお礼といたしたい。それは

上善若水水善利万物而不争 夫惟不爭故無尤矣
処衆人所惡故幾於道矣

と言う語である。即ち美德の最上のものは水の様なものだ。人
間社会は勿論お互いの個人生活にも、水無くして一時も過ごせ
るものではない。近代文明の基をなす水力発電も、水のおかげ
である。それなのに水は、俺が、俺がと言つて、威張つた例がな
い。水は方円の器に従っているではないか、とかく人間社会は
上へ上へとやりたがるのだが、水は人の嫌がる下へ下へと流れ、
決して上へと望まない。これこそ真の人の道と言ふべきだ。諸
君、これを参考にしてやつてもらえば老骨の幸いこの上もない。
と申された。満座の面々全く感極まつて、水を打ったかの、静け
さであった。宴席が進むにつれて、なごやかな歓を尽くしたので
ある。受付で会費云々の先輩が、「今日は受付の処で大変失礼申し
て済まなかつた。私は今日の宴会位身にしまひて有りがたく、有意
義なことは始めてだ。こんな会なら毎日でもよい」としみじみ言

われた。これは当時長野県総務課長橋詰英雄氏（紡五）であった。その夜先生は永井君宅に、更に一泊され、翌二十九日早朝長野市在住の卒業生等に見送られて、帰路につかれた。永井君外一人渋川までお伴した。これが先生最後の汽車旅行となったことは、感慨一しお無量なものがある。

（組合製糸北水社事務取締役）

針塚先生に寄せて母校の今昔を思う

（昭、九、蚕） 町 田 博

先生の撰書 十年も前のことである。私が郷土特産のくるみ（胡桃）の研究に手をつけて間もなく、或る古老の話をたよって、今は上田市に合併されている豊里村林之郷部落を訪ねた。その「功農之碑」が、図らずも針塚先生の撰書によるものだった。碑面には次のように書かれてあった。

荒井翁功農之碑

農林大臣従三位勲二等 島田俊雄題

従三位勲二等 針塚長太郎撰

荒井翁名小仁三郎嘉永三年正月二十日信州小県郡豊里村林之郷に生る、夙に殖産興業に志あり、米、麦、養蚕、養畜の改良、新田の開発等に貢献する所鮮からず、当地方に於ける短冊苗代の如

き翁の創始する所と云ふ。而してその最も力を注ぎたるはカシクリミの改良普及なりとす。（以下省略）

昭和十一年十二月

従七位勲八等 窪嶋 堀内重義書

先生はよく揮毫に応ぜられることは聞いていたし、また先生が校長を退かれてからも名誉教授として母校に一室をもち、専ら揮毫に日を送られていた昭和十四、五年の頃、同室で私は白倉一男君（現在母校管理係長）とともに、人事係として校内各科の卒業生及び同窓生の就職斡旋事務を総合執行していたので、先生の紙面に向って筆を揮うお姿をよく見てもいたし、時には墨をすっておあげしたこともあった。しかし現実には碑文となって先生の名が刻まれているのを見たのは始めてであった。

上田地方には先生の撰書になる記念碑等が諸所にあることも聞いているので御存じの諸氏もあらうと思う。また何所か忘れたが或る村の神社の祭に立てられた大きな「のぼり」に先生の書を見たこともある。

先生が蚕糸の道を究めながらも蚕糸とは全く縁のないこの方面に偉大な見識をもたれ、人々の敬服する業績を残されておることは、先生の別な人間味に触れる思いがするのである。

私は専攻した養蚕関係からはなれて農作物関係に進み、かつての繊維農業科の設営に奔走し、専門とするところを蚕体病理・栽桑・繊維作物・園芸作物と四転して現在は付属農場の運営に専任

しながら、繊維とは全く縁のないくみの研究をしている。そしてくみの産業化に大いに寄与し、地域農業において人々から喜ばれる業績を残したいものと自らを励ましている。当時先生は私がこんな道を歩むとは思わなかったでしょう。

学生時代の印象

私の学生時代における先生の思い出は「修身」を教えられた時の先生のガウン姿である。当時黒のガウンを着て教壇に立ったのは他の教授にはみられず先生だけだった。いかにも大学の講義を受けている感じがして興味深く聞き入ったものだ。先生の講義は何年間あったか忘れたが、話された内容は勿論精神修養的なものであった。中でも極めて具体性をもった例えば手紙の書き方、人を尋ねる時の心得等の如き処世常識（近代的に云うエチケツト）が多く、それにソ連の共産社会の様子、ゲ・ベ・ウのこと等が記憶によみがえってくる。当時上田中学から松岡重三郎講師が「倫理学」の講義に来ておられた。これには土田杏村の著書が教科書に用いられていて、難解のことが多かった気がする。これに比べて先生の内容は、通俗的な生活に即したものであっただけに、極めて気楽に、且つ興味深く聞いていた。現在の私の記憶によみがえってくるものに先生のお話のことが多いのは、それが具体性をもっていて、卒業後の社会生活において、たびたび体験して来たことのためである。

松岡講師の講義は難解ではあったが、私の最も気を引いたもので、また級友牧島章吾氏（蚤二）の感化もあって、後に阿部次郎著「倫理学の根本問題」、桑本巖翼著「哲学概論」を読むき

かけとなり、それらが私の人生観・社会観の基本となったことと思っている。

先生の精神教育の標語だったと云われる「進当難局挺身従事」はいつから先生のモットウとなっていたか知らないが、我々の授業中では直接耳にすることはなかった。しかし卒業式の告辞の中に出て来た。先生は「新卒業生諸子に餞する」と発言して、社会並びに業界の情勢を述べた後「諸子克く進んで難局に当り、身を挺して事に従い、この苦境打開の先驅を以て任じ、以って国家が諸子を養成したる報恩の実を挙げべきなり」と諭された。このお言葉は我々の卒業式以後の告辞の中には聞かれなかった。また先生は卒業生の一人々々に金言名句を書かれた色紙を下されたが、私はこの標語を書いて頂いた。そして今も私の人生訓となっている。これは所謂犠牲的精神に通ずるものであって、事に臨み常にこの精神で実行してゆくには余程強い意志と体力が伴わなければ困難である。私は私の社会生活に処して常にこの精神で臨もうと考えながらも、それは徹底することはできなかったが、今なお私の人生哲理として私の血潮の中に流れている。

現時世ではこの精神は軽視され、その精神に徹したところで却って冷笑される風潮でさえあり、寧ろ安易な道を求める気風、普通の視野に至って考えるよりも、自己の立場に拘泥する気風、さらに進んでは人の犠牲において自己を利する気風が多いとさえ思われる。これは学生やその他の若い層が一般に気力に乏しいと云われる所以でもある。時代が日進月歩するに反し、人間社会の基

本的条理が軟化したり曲げられたりすることは歎かわしいことである。

副手会のこと

私が卒業して母校に残り三年目頃だったろうか、我々副手仲間に先生から戒告がでた。それは一部副手の夜遊びが度を過ぎているとの世評を耳にされて、「学校では勉強させるために副手をおくのであって、そのための下宿代を支給してやっているのであるから、芸者遊びをするなら給料はくれぬ」と云うのである。しかしまさかそんな無慈悲なことはすまいとは思っていた。私は遊んでいた仲間の二人を知っていた。彼等はその後、の転勤先から毎月給料の何割かを料理屋の借金返済に送金していたものだ。

当時金三十五円也の安月給では勉強も身が入らぬと云うわけで、待遇改善を叫ぼうとよりより話合っていた矢先、先手をうたれた形だった。一般の月給が六十―八十円と云うのに、その半分以下の安月給でよくも勤務ならぬ勉強に励んだものである。この頃の我々の給料は現在のような一定の俸給表に準拠したものでなく、校費の中の消耗品費から支弁されていると云うことで、書記（現在の事務官）から「物品を浪費すると給料を下げるぞ」などおどかされていて、昇給などは全然考えられていなかった。副手は学生の延長で、月謝を払わず下宿代をもらって勉強している幸福者だと校長は考えていたのだから無理もないことだった。

しかし我々は我慢ならず、間もなく副手会を組織して進言の結果「三カ年毎に五円昇給」の口約を得た。即ち団体交渉に成功し

たわけである。なお副手会はその使命を顕現するために、かつ副手会が単なる階級斗争団体と思われないうために、当時原田教授が司会されていた談話会（今様に云えばゼミナール）の司会を引受け、これを積極的に運営するとともに、各科の若い層の社交的融和を計ったものだった。

当時各研究室でも、各科でも、謙虚且つ非干渉的であって、しかもそれでその個々では殆ど無力で、相互に補足し援護し合っていてこそ、始めて存立の意義があるとの認識の下によく協力し、対外的には緊密に団結し、内部では他方を犠牲にして自方を優位にするというようなことは見られなかった。これは先生の統率の手腕に因るところであらう。

年中行事の二・三

当時の先生は校長として当然ではあるうが、校内によく目を通っていたように思われた。それは諸行事に先生自らが先頭に立って、時には全職員、時には学生・職員・校内全員を誘導して鼓舞したからであらう。例えば校庭の除草清掃にしても校長自ら農具を持ち、教授も研究の時間をさいて、全職員・学生が校庭に集まって勤勞する。終ってその場で簡単な茶話会をやる。それはまた自然に融和の機会ともなった。現在運動場は人夫賃をかけて請負で除草されているし、建物周囲は学部長の要請で除草週間を設けて年一回各科毎にやっているが、教官は殆ど手を出さない、学生も協力しないし、昔の様に整然とは行われていない。共同精神は地に落ち、自己本位の面がこゝにも見受けられる。このような態度が学生に反映してか、学生の気風にも級

友としての、また同学の友としての情愛に薄いように思われるがどうか。

また当時の教職員と学生の融和或は上下級生間の交友は、毎年入学式後の好い日に行われる新入生歓迎ハイキングで、培われ深められたと思う。それが校の時期だけに、近郊の名勝旧跡へ春霞の下、ひばりの声を聞きながら、学生・職員・教授も渾然として一団、また一団となり、或は語り合い或は歌いつつ、ハイクしたものである。この雰囲気が遠隔の地、他府県から来た学生にとっては、上田の風物誌を知るきっかけとなり、そして更に卒業後母校を懐かしむ情の素地ともなっているものと思う。

また職員間の最も楽しい融和の機会は忘年会であった。これは校長の発起で全職員洩れなく出席したものだ。校長が年末賞与の大部分を投げ出して開かれ、初期の頃は校長が全職員の慰労をしてくれた形だったようであるが、私が職員となった頃は階級差をつけた会費制となった。この会は校長先生が無礼講を宣言して自ら芸者と一緒に踊り出すのであるから、若い者も日頃の緊張を解いて大いに飲み語り騒いだものだ。先生のその時のくだけた様子は日頃の先生の顔付きや風格のどこにかくされているのかと驚くほどだった。

近頃の忘年会は学部長のほか部局長等が発起人となり、全職員のほか名誉教授、非常勤講師、校医等にまで広く呼びかけて行われるが、出席者はどういふものか少なく半数以下であろうか、殊に教官以外の職員は殆ど出ないし、教官の若い層の出席も少ない。

忘年会こそ年に一度の水入らずの、そして上下を問わず自由に話し合える無礼講の会であって、しかも民主的運営を標榜している我が学部において、下情を遠慮なく上通し、上意が融和の中に下達するのには絶好の機会でもあると思うのであるが、何故か盛会でないのは遺憾である。

信大内でも母校は最も民主的・家族的だと云われるが、放漫の影を宿してはいないだろうか。全職員は挙げてその英知と鋭気として話し合いとで、学校をして最も充実し発展する方向に健全な歩を進めているだろうか。狭量、故意の迎合、便乗的野望等に堕した不快な風潮がないだろうか。

お互いに自戒し、理解し合い、他を尊重し合い、励まし合い、そして助け合ってきた針塚校長時代の気風は、たとえ復古調であろうとも再現したいものである。

会議と出張 私は先生の校長時代の会議に出た経験はないが、欠席者も殆どないと聞いていた。現在は民主的運営と云う基本的理念から、教官会議或は教授会が頻繁に聞かれるのであるが、欠席者は多く、時には裁決するに会の成立定数が心配される程のこととがしばしばあって、現学部長も大いにこれを歎いて遂に戒告を出すに到った。会議が多過ぎて幾分食傷している向きもあるし、会議運営の方法にもよるが、大体会議に対する義務感が稀薄であることも否定できないであろう。

以前ならば欠席常習者と云うことで目星を付けられ、或は昇給或は賞与にもひびいたものだと思っていたが、現在は会議をさぼ

ろうが授業をなげようが、或は受持の職務に怠慢であるうが、それに対して批判もなければ叱責もないし、賞与ならざる勤勉手当にもひびかない。云わば自己に何の不利ももたさないものであるから、それには一向に平気さと云った風潮がないでもないであろう。

先生の時代は校費で学会へ出席するにしても、その他用務で出張するにしても、自ら申出して出張できるとは限らなかった。凡て校長の命令である。だから校長は誰がどんな用務で何処へ出張しているかを承知していたし、出張者は帰校後直ちに校長に復命したし、学会出席者は前記懇話会に報告したものであるが、今は全く自由であり、無統制でさえある。と云うのは届出書を出せばよいことになっているからである。中には無届出張も多いようである。校費出張にしても、自費出張にしても（この場合は賜暇をとることになる）本来ならば認可なり、許可なりがあつて、始めて出張が成立するものであるうが、現状はその要なきが如くである。嘗て或る教官の出張と云うか学内不在が余りに甚だしいことが、会議の席上話題となり、批判があつて自肅的な申合せができたようであつたが、果たしてその実行の度合はどうであらうか。

教育と研究 専門学校当時は教育が主であり、研究が従であり、先生は校長であり、且つ「修身」を教授されたので、先生の御専門は今流に云えば所謂「校長学」であり「教育学」であつたかも知れない。大学になってからはそれが逆になつて研究が主であり、教育が従であるそうだから、学部長も含めて教官はそれぞれ

れ専門とする学科の研究に専念し、教育的任務は二義的に考へてゐる。

併し学部長はその上に学部を統括する管理職であるから校長よりも御苦労であるが、一面に教官会議、教授会等の議決機関をもつていて、それらの裁決事項を代表して執行すると云うように、自らの抱負経綸を積極的に行うものでなく、幾分象徴化されているところもある。各教官はその任務を専門とする研究活動にしほられたから、大いに研究をしてその業績をどしどしあげてきている（私は附属農場専任、学科兼任だからそうはいかないが）。併し一面自己の研究に熱心の余り、学生に対する教育的関心、或は授業に対する義務感が、専門学校当時より薄くなったようにも思われ、教官と学生との親密が浅く、学生に対する情操面の感化が弱くなっている感がないでもない。また研究・調査のための出張等で授業が犠牲にされることが実際に多いようで、以前程に教育と云うことに熱が入らないのは、現在の学生にとって気の毒と云わざるを得ない。

研究は自由である。従つてその自由な立場で計画された研究活動を主軸にして自己の職務を律するから、その言動は利己的に傾き易く、時には公私の区別があいまいな場面さえ往々見られる。また自己の研究と云うことに執着する余り、個人的環境が団体的（社会的）環境に優先するのだと云うような考え方が發展し、とかく学部的見地に立つて思考し、判断すべきことを、私的見地で考へる。なお極端には自己の研究遂行上の利不利に照らして考へ

ると云うように、一般に狹量になっていられるのである。

なお一般勤務の上では、以前には官吏服務規律が厳然としていたが、現在はそのようなものが非常に自由化されて、上からの拘束或は叱責されることが少なくなり、寧ろ各自の自律心に待つと云う傾向である。社会性の進歩と云うべきところであるが、奔放不羈に流れ易いのは見のがせないところである。

校長は命令権者であったが、学部長は代表者に過ぎないと云われるから、当時と現在とでは学校を総理する上には大きな違いがあるわけで、大体校長に限らず当時の長たる者は權威をもって、また全責任を負って勇敢に抱負経綸を行うことが、その本命とされていた。従って校長は部下の誰にも氣兼ねするところなく、指示命令を徹底して統率することができたが、針塚先生はその地位にふさわしくその才と識見に長じておられた。一方職員は校長の統率の下に、そのモットウに従って自己の任務を忠実に遂行することが、学校全体の機能を最もよく發揮し、学校の発展になるものとの信念に徹し、自己を全体の中に没入し、その調和の中で自己を活かしたものだ。そのような校長・職員の気合が母校の使命を円滑に果たし、母校の隆々たる発展の歩みを進め得た主因であったと思う。

(信州大学繊維学部助教)

先生の偉大さを外部から教えられた

(昭、一〇、糸) 横内 豊彦

戦後初めての学校訪問 昭和三十六年六月二十二日戦後はじめて学校をお尋ねし、御無沙汰を謝し、特許庁の紹介を兼ねて特許法の講義をした。

駅から学校までは道路・建物等すべてが変わっていた。前にあったものがなくなつて、新しいものに置き換えられ、戦前の姿を懐しく想像しての尋ねる家、尋ねる人はなく、浦島太郎の話を思い出して淋しかった。

学校は建物が増えて変化はあるが、総合繊維学部としての匂いは別として、昔の面影が濃く残っていた。特に樹木や建物から針塚先生を偲ぶことができた。そして針塚先生の色々のことが思い出された。

先生に対する一般の人氣 製糸科一年の夏休み(昭和六年)

郷里に帰った機会に、親戚や友人を尋ね廻って歩いた際、「君の学校には偉い校長先生が居るそうだね」と至る所で聞かれた。繊維関係の仕事に携わっていない人までが、先生に親近感を抱いているのには驚いた。私も入学したばかりであったので、先生の人格に親しく接したわけではなく、精神訓話の際に、お話を聞きする程度であったので、郷里で認識を新たにしたわけである。

それから学校を卒業して特許庁に就職したが、特許庁という所は、産業の各分野における発明考案を審査するのだが、各審査官は、当時全国の大学・専門学校（各学校は特色があった）から集まっておられた。私が辞令を貰って特許庁内を挨拶に廻って歩くと、蚕糸関係の学校でもない学校の出身の審査官が、先生のお名前を知っていて、その人格の偉大さを再認識させられた。学校入学直後と卒業直後と二度びっくりしたわけである。

先生の風格 先生には学校で常にお逢いすることはなく、時々廊下で歩かれる姿に直面したり、精神訓話の時間に、壇上の先生の姿に接するのがせいぜいであったが、先生は常に胸を張って颯爽と、しかも足早に歩かれた。スピードが体の全体から滲みでて、活力が漲り、自信に満ち満ちていた。先生を取りまく周囲の空気までが生き生きと、私には感じられた。

精神訓話の時間 先生がガウン (GOWN) を着て出て来られて、孔子・孟子の漢学を中心に精神訓話をされた。「奉仕の精神」、「積極的に事に当れ」、「困難の仕事は、率先して解決に当れ」、「労働の神聖」、「正義を貫け」等を特に強調され、講義の底を流れるものとしては、宗教的な雰囲気も感じられた。先生は学生が卒業後、社会の如何なる荒波にぶつかっても、それにへこたれない、社会の為になる人間を養成することに、主眼を置いていた。目先だけを見て、小利口に立ち廻ることを嫌って居られるように思われた。

そしてこの「精神」を、学問を通じてばかりでなく、武道の奨

励を通じて、又日常の実践を通じて学生の心身両面よりその鍛練に勤められた。「ガウン」を捲くり、右の手をぐっと張って、白墨を非常に早さで黒板に投げつけるように字を書かれた關志満々のお姿には、右の「精神」が躍如としていた。

現在全国の繊維関係の各種工場には、ハイクラスの幹部に就いている卒業生が多いが、私は出張の際それらの方々と接し、現在のお仕事に關するお話を伺っている中に、その方々の考え方から先生の精神訓話を思い出す機会によくぶつかって、心温まる思いがする。即ち先生は他界はしているが、その「精神」は現在も卒業生を通じて、全国津々浦々に具現されているといつてよいわけである。

先生の思いやり 在校中、私は社会に出る前に、御注意を頂こうと思って、先生のお宅にお邪魔したことがあった。その日は、幾つもの学生のグループが来て賑やかであった。皆議論をしたり歌を歌ったりしていた。先生はくつろいだ和服姿で現われた。私は初めてであり、学校での厳正な先生のお姿を意識していたので、相当緊張して固くなっていた。暫くお話をしていたが、先生は部屋の机の上の墨を取り出して半紙に筆で絵を書き始めた。蘭の絵であった。先生は蘭の絵を好んで書かれたようであったが、和服姿で濃淡各種の墨を使って蘭を書かれる姿は、学校で私が意識していた先生とは別人のように感じられた。あの關志満々の姿はどこえやら消えて、優しい慈父に変わっていた。絵を書きながら私の話を聞いてくれた。私も気が楽になって色々社会に出てからの処

世術を教えて頂いた。先生が私の緊張をとかれた思いやりには感謝している。

先生は厳しい半面、優しさの持主であった。そして毎日、学校での厳肅で闘志満々の力は、自宅での和服姿の墨絵の中から育まれていることがわかった。

以上針塚先生について思い出すままに書いた。

(通産省特許庁第三部審判長)

先生は永久に生きていられる

(昭、一一、蚕) 関 博 夫

一代約三十年にわたる名校長針塚先生の追想原稿の募集があったので、筆をとって見た。しかし私は先生の教え子としては末子に近く、また卒業後も母校にお世話になりながら、生来の田舎者であり封建的遺風の残っている当時では、私の身分として到底先生と直接親しくお話し申上げる機会は何れそうもなかった。そのためにたゞ偉い人と云うだけのことしか判らない状態で、云わば私にとっては先生は雲上の人と云う感が深かった。しかしよく先生の人間性を分析して見ると、無言の中に偉大なる教訓を与えられていた。その一、二の例について書くことにする。

針塚教育 その当時例年行われていた炎熱燃ゆるが如き夏の校庭の除草には、先生自らステテコ一枚で草掻きを持たれ、学生職員の前頭になつて、汗と土にまみれ、率先身を以て範をたれら

れた。そして汗の体験による労働の神聖を鼓吹され、針塚精神である「挺身従事」をモットーとして我々を教育された。この事は假令敗戦後我々の考え方が変り、日本の教育制度が改新され、世相が一八〇度転換したにせよ、なお今日もこの様な態度で事に処するべきではなからうか。そしてこの精神を継承する事により、針塚先生は永久に我々の中に生きておられると思う。

惠則足以使人 この事柄は名校長として長くご在職になられ、現在の当学部的基础を築かれた一要素と信じられる。この一例として私が当学部の前身である蚕糸専門学校を卒業し、蒲生先生の下で副手を勤めていた時代の思い出がある。その当時蒲生研究室では、桑葉並びに蚕体におけるビタミンCに関する研究が行なわれ、東京の北里研究所藤田博士のご指導を賜わっていた。北里研究所への出張は上田を朝一番の汽車に乗り午後一時頃研究室に着、直ちに実験に着手して、その日の夜行で帰校することになっていた。この出張旅費は蒲生先生のポケットマネーであつたと思われる。この事を針塚先生がお聴きになり、あらためて公務出張としての旅費を下された。この当時の若かりし私は非常に感謝感激した事を思い出す。

また昔新年の宴会の時だつたと思われるが、職員一同針塚先生を囲んで御酒を戴いていたところに、故村瀬巡視長が新年のご挨拶に來られたのを見て、先生は村瀬々々とお呼びになり、自ら杯を差出された。その時の村瀬さんの姿は今なお眼前にちらつくが、全く有りがたさに感極まつた態度が非常に強く我々の目にも見ら

れた。今は地下で先生と昔日を語っておられる事でしよう。

この拙文を書いているとき、ふと卒業当時のアルバムに、先生御揮毫の色紙が貼ってある事を思い出し、開いて見ると「敏則有功、惠則足以使人」とあり全く言行一致我々に良き教訓を示された。

擱筆するに当り謹んで先生のご冥福を祈り上げます。

(信州大学繊維学部助教 農学博士)

心の草を取れ

(昭、一二、蚕) 加藤 沼 二

それは昭和九年九月のことであった。永い夏休みを終えて久しぶりに学校へ帰った我々は、始業式の劈頭針塚校長先生より次のような訓示を受けました。「今日から第二学期が始まります。永い間諸君は休暇で休んでいたの、体がたるんでいるように思います。今から運動場の草を取ってもらいます。それは同時に諸君の心の中に生えている草を取ることもあります。たるんでいる心の草をしっかりと取って二学期にはうんと頑張ってください」と言い終わると、軽装になられた校長先生は、真先に校庭に立って草をむしり始められました。約一時間位で見違えるようなきれいな運動場になりました。それを見て私は私なりに何か知ら深い感銘を受けました。爾来二十有余年、私はやゝもするとなまけようとする心の草を取り去ることに心をくだいて居ります。心の草を

思う時何時でも針塚先生のあの崇高なお姿を偲んで心の糧としています。全く先生はいつまでも私の心の中に生きて居られるように思えてなりません。私も片田舎の一介の中学校教師であり、何時でも針塚先生のような実的な指導をしなければならぬと、心掛けて居りますが、その一端を真似ることすらなかなか程遠い道であると思います。要は心の草の取り方が足りないのです。針塚先生の心の草の教えこそ、私が終生忘れることの出来ない先生の徳を偲ぶよすがの一つであります。題して「心の草を取れ」といった所以であります。

(元宮城県柴田農林学校教諭)

コートの草取り

(昭、一三、蚕) 竹 田 寛

針塚先生について思い出す二、三のことを書かせて頂きます。先生はしばしばテニスコートに來られました。そしてコートに草が生えているのを見られると、自ら草取りを始められました。私達はあわてゝラケットを放り出して草取りをする状態でした。そして先生は「テニスコートに草が生えているようでは決してテニスは上達しない。何事もそうである……」と云われました。この言葉は非常に尊い教訓であると密々思い、未だに忘れられない。それを私も良く運動をする若い学生に話しています。今私は弓をやっていますが、射場に草が伸びても学生は一向に平気で居りま

した。この時私達教官は率先して数回、草刈りをやりました。これを見て学生も弓をやめて草刈りに協力するようになり、今では私達教官が草刈りをしなくても済むようになっていました。

私達が三年生の時に針塚先生は勲一等を受けられました。先生は修身の講義に来られました時、その勲章を持参され、私達に見せて下さいましたが、その際に最も印象に深かったのは、講義が終られた時に教壇にその勲章を平然と置いて行かれ、唯一言「誰か後で持つて来るように」と云われて悠然と立ち去られたことでした。私達は「汚さないように……」とか何とか云い乍ら、勲章の表や裏や、重さまで直接手に触れる光榮に浴した次第です。

次に、針塚先生は私達の卒業と同時に御勇退されましたので、私達が先生の教えを受けた最後の卒業生であったことも、何か胸に云い知れない感激を未だに持つて居ります。

(信州大学繊維学部助教授 農学博士)

御教訓の体験思ひ出

(昭、一五、蚕) 加 子 三 郎

潜戸のお辞儀 月日のたつのは早いものである。

私の針塚校長先生に対する思ひ出も、はや二十五年前のことになる。中国の古詩を借りて心境をのべれば、

悠々たるかな白雲

寂々たるかな人生

と、いったところである。たしか、昭和十三年一月下旬の日曜日のことだったと記憶している。修己寮の南京虫堂(七号室)で、食い残しのパンをかぢりながら英語を勉強していると、総代の小山富二君(蚕二七)(戦死)が、ころがるようにして入ってきた。「何だ?」と、たずねると、

「おったまげたぞ。いま、校長の家から連絡があった。おれたち二人にすぐいこのことだ。昼食を用意しているそうな」とわめき立てる。

これには、私は全く閉口してしまった。というのは、当時の私は、特別な事情で、貧乏書生の最たるものであった。着ている服は、浪人時代に東京の古着屋で手に入れたもので、肘は既にぬけており、ズボンは膝小僧が頭を出しかけているという代物であった。これではいくら心臓者でも、校長のお宅には行けない。それでいつものように、制服を借りようと寮内を探し廻った。が、あいにく、相棒たちは外出していて、適当なのが見つからない。窮余の策として、仮病を使おうと試みたが、それはクリスチャンの小山君の良心が許してくれない。結局色のあせた紋付に裾だらけの袴という恰好で参上したわけであるが、意外にも校長は小生の服装について一言もふれなかった。いやそれどころか明るい表情で、冒頭から単刀直入に話しかけてこられた。

「加子君にはお願いがある。君は校友会歌の作詩者です。その名譽をそこなわないように自重して下さい。また社会に出てから也大いに勉強して下さい。要は君が自分の作った歌の精神を忘れ

ないことです」

こう云ったきり、先生は話題を刀剣やスポーツのことに切りかえ、家族と団欒するかのようにくつろがれた。

それはともかく、御馳走をたいらげ、お別れの挨拶をしようとする、先生は姿勢を正して、次のようにおっしゃった。

「先輩の家を訪問して帰る時、先輩が玄関まで見送ってくれることがあります。その場合、門のところで、玄関の方をふり返って見るのが大切です。もし、先輩が玄関に立ち続けていたら、もう一度、御辞儀を下さい」

「それでは、玄関から門にいたる路が曲っており、植込みなどがあった見透しがきかない場合は、どうしますか？」と小生が質問すると、

「玄関が見えなくなりそうな所で、ふり返って見るのです。簡単なことのようにですが、身につくまでには、修練がいります」と、親切に教えて下さった。

それから、十二年の歳月が流れ、昭和二十四年の夏にはいつからのことである。私は、内田俊一先生（資源調査会議長、元東京工業大学長）と共に、財界の巨頭池田成彬氏を大磯の別荘に訪れたことがある。話題は、「将来の日本の繊維産業構造」ということに絞られていたので、つい得意になって、私見をまくし立ててしまった。池田様は、三時間にもわたる雑談で、かなり疲れていたようである。それでも別れる時には、玄関まで見送って下さった。

玄関から正門の横の潜戸カクレドまでは、およそ五十歩ほどの距離があった。私にはこれが非常に長く感ぜられた。まさかと思ったが、針塚先生の教えに従って、ふり返って見た。驚いたことには、池田様が玄関の中央に、行儀よく立っておられた。そして小生が頭を下げると同時に、軽く会釈された。

人間というのは、ちょっとした拍子に、やたらに嬉しくなることがあるが、この時も、修身の試験で満点をとったような気がして、ほんとうに愉快であった。

強力な牽引車

それから、針塚校長先生については、今なお脈々と心に迫る思い出が、もう一つある。それは、私が満州国官吏として、安東に向う直前のことであった。私は兄が工面して買ってくれた立派な制服を着て、先生のところに最後の挨拶に行った。そのとき、先生は鼻カゼを引いておられて、いつもより元気がないように見受けられた。それでも、「禹は家門を過ぎて入らず」から始まって、漢の高祖や清の乾隆帝に及ぶ人物評論を長々とのべられた。私は先生の意図するところが、奈辺にあるのか判断に苦しんだ。そのためにどんなふうに話を結ぶのか、気になって仕方なかった。ところが、さすがは老巧な先生である。次のようであっさりと結んでしまった。

「何事も、国家の為になることなら、断乎として邁進すべきです。天は国の為に働く者に、味方します。次に、もう一つ注意します。君は満州に行けば、馬力のある働き者になるだろう。だが、仕事の成果を独占してはいけない。三分の一は上司に、三分の一

は部下のものと心掛けなさい。相手が日系でも、満系でも同じです。要は公平無私であることです」

この教訓は、私にとって、非常に有難いものとなった。というのは、私はこれを実践したおかげで、敗戦になってからも、満州で幸運を拾うことができた。中国人の朋友が、私の生活を助けてくれたばかりでなく、身の危険をおかしてまでも私を弁護してくれるという一幕さえあった。

いいかえれば、私にはこの教訓が「救いの神様」となったわけである。

いや、こればかりではない。それは、今なお、私を前へ前へと引きずって行く「強力な牽引車」でもある。

常田が岡に郭公が鳴く頃 青葉が盛り上り、常田が岡に郭公が鳴く頃になると、私はやたらに思索的になったものである。

このたびは、こんな時分に、針塚校長先生の思い出に耽ったおかげで、その持前が面白いほど赤裸に現われてしまった。そして忘れかけていた学生時代の印象や感激を、はつきりと呼びもどすことができた。

恥ずかしいような、懐かしいような、淋しいような、それはそれは複雑な感情のひらめきが、すばらしい力で迫ってきて、つい涙に似たものが心の底を横ぎって行く。

(科学技術庁資源局資源統計課長)

卒業までの九カ年変わらざる御恩情

(昭、一五、蚕) 藤 沢 豊

私は母校に入学して卒業まで、九年間の長きに亘ってお世話になりました変わり者です。昭和六年四月校長先生の目前で、希望に胸をふくらせながら、真新しい毛筆で宣誓書に署名してから、昭和十五年三月卒業証書を手にするまでの苦難に満ちた九カ年でした。その間針塚先生を始め、養蚕科の多数の先生方から、格別の御同情と御指導を頂きましたことは申すまでもありません。ただ教師と学生と言う関係だけからではなく、人間として愛情に溢れた御恩になりました。いまこのつたない一文を記して当時を回顧し、これ等の先生方に感謝の意を表したいと存じます。そしてこの針塚先生追想録が私の家に永く保存できますことは感謝と感激に堪えません。

私の苦難の道は昭和八年に始まります。三年生の養蚕実習で、春蚕の掃立を終って間もない頃でした。春休みを郷里の岡山で過ごしていた私は、どうも体の調子が悪くて三年の始業に登校できそうにないので家で休養していました。上田の級友からは「どうしたのか、早く学校に出て来い」との手紙がしきりに来ました。頑張り屋の私のことでしたから、この手紙を見ると矢も楯もたまらなくなつて、少々無理とは思いましたが、元氣を出して上田に行くことにしました。学校に着いてみると級友達は倉沢先生の引

率で東京の見学旅行に出た留守でした。その見学の中には普通では拝観できない紅葉山の見学もあったので、再び勇気を出して東京にいる学友の後を追ったのでした。

旅行も無事終って養蚕実習にとりかかりました。私は級友数人と校門前の宮尾さんの離れ一室を借りて合宿していました。この実習中は蚕室の廊下に倒れてしまいました。驚いた級友達は早速タクシーで私を上田病院に運んでくれました。郷里には電報を打ってくれたのか、翌日父がやって来ました。後年父は口ぐせのように当時の模様を話していました。

その時の級友や先生方の御同情と御親切を思いますと感慨無量です。そして実習中毎日のように病床を見舞ってくれました。それから約一カ月経ちましたが、私の病状は一進一退で回復の見込みも立たなかったようでしたし、異郷でもあったので、父は当時の上田病院長森博士と相談の上、一応私を郷里に連れて帰ることを決心しました。私を乗せたタンカが級友達の手によって上田駅に着いた時、ホームには針塚先生や諸先生、学友達が多く見送ってくれていました。その顔が夢の中の私の眼にはつきりと焼きついていました。その針塚先生が私の枕元に來られて大きい声で「藤沢！早くよくなって……元氣になったらまたこい」と力強く言っただけでした。私はとめどもなく熱い涙が頬を伝わった。私はこれで先生や学友達とも一生のお別れになるかも知れない。たとえ死んでもよい。私はほんとうに幸福だと思った。私を乗せた汽車は静かに上田の駅を離れていきました。

それから病魔は数年間私を離れませんでした。その闘病中いく度か死をも覚悟しましたが、私の淋しい心を慰め、力づけてくれたものは、上田の恩師や級友達の温かい同情と激励の言葉でした。療養中は父から度々針塚校長・倉沢・蒲生・佐藤・山口の諸先生に連絡をとってくれていました。針塚先生や倉沢先生からは、特に御懇切なお手紙を頂きました。針塚先生は巻紙に達筆でこまごまと療養上の注意やら闘病の方法について記されてありました。その中には「お灸がよく利くから試したらどうか」ともありました。（その手紙は後で額にして保存したいと思っていましたが朝鮮から引揚の途中紛失して残念です。）

こうしてその後数年間療養の甲斐があったのか、健康もだんだん取りもどしてきましたので、倉沢先生に復校の御相談をしました。先生は私が余りにも長い療養生活でありましたので、いままぐ復校は無理であろうかと、ひと先ず隣県の広島で蚕種製造をやっておられる小川保先輩（蚕二）の処を訪ねたらと紹介をして下さいました。其処で一年足らず御厄介になりましたが、小川さんも大へん同情して再び倉沢先生と御相談下され、その結果、昭和十四年一月から母校園場の倉沢先生の所で無給副手として勤めることになりました。そこで四月の養蚕科三年への再入学を待ったのでした。その時には針塚校長は御勇退されておられました。教授会では余りにも長く六年間も学校を離れていた私の再入学には相当難色があった由ですが、養蚕科の先生方の格別の御同情と御配慮によりまして、教授会も無事に通過いたし、編入試験の結果再

入学を許可されることになりました。

自分のことを長々と書いて針塚先生の思い出を書く余白も少なくなりましたが、「進んで難局に当り、身を挺して事に従え」の針塚精神こそは私の心に生きて脈動を続けています。

学生時代のある土曜の午後園場に行ってみると、針塚先生が自ら飯を取っておられることを目撃したことがあります。私は思わず、頭が下りました。針塚精神はこんなところにも生きていますのです。先生は実に無言の裡に人を導く偉大な教育者であったと思います。

(岡山県鴨方高校教諭)

追 想

(昭、一六、蚕) 松尾卓見

針塚先生が退官されたのは昭和十三年の春であったが、私はその同じ春に上田蚕糸専門学校に入学した。入学式の直後に先生の金学生に対する告別の挨拶があった。上田の周辺で生まれ育った私は、この高名な教育者に大いに期待していたので残念な気持ちであった。それに私は入学にさいして先生のお世話になったいきさつもあった。私は無試験入学資格があったのであるが、当時体格がひどく貧弱だったので体格検査が問題であった。校長の意向がはたらいて無事入学出来たときいていたのであった。田舎育ちの私は、入学挨拶にわざわざお宅を訪問するというような、気のき

いたことは出来なかった。たゞ一度、何かのついでに、同級生のK君と一緒に松原町のお宅を訪問したことがある。しかし折悪しく先生はお留守で奥さんにおめにかゝって帰って来た。

私は昭和十六年三月予定通り卒業したのであるが、同級生のT君が先生に揮毫をお願いするというので、あつかましくも私の分もお願ひした。先生の書はほしいのだが、いまさらお目にかゝるのはおつくうなので、うっかりこのような失礼をしてしまったのである。しかし先生は快よく書いて下さった。

自非_レ詠_二万卷_一、書_一 寧得_レ為_二千秋_一、人_一

自非_レ輕_二一己_一、勞_一 寧得_レ致_二兆民_一、安_一

というすばらしいもので「為松尾卓見君」と為書があった。その年京都大学に進学していた私は、この書を北白川の下宿で拝受した。いくらかつな私でも、自分の非礼に気がつかないわけにはいかなかった。早速お詫びとお礼の手紙を差上げたが、それに對し先生から御返信をいただいた。

復啓益々御健祥奉賀候此度は御鄭重なる御手紙をいただき却而恐縮仕候貴君が優秀なる成績を以て卒業なされし事は小生に取りても本懐の至りに御座候是非斯くあれかしと念じ居りたる次第に御座候此上は健康第一を主眼として進まれ後年の大成績を期せられ度希望仕候決してあせるには及び不申候精々御注意なさるべく候

敬具

というのであった。私達の卒業の時から針塚賞というものができて、私はそれをいただいたのであるが、そのことのほかに入学の

さいのことを御記憶下さっていたことが、この御手紙でわかるのである。昭和十六年には先生はすでに御郷里の群馬に移って居られたので、夏休みに帰省した際改めて御挨拶するというわけにはいかなかった。私は戦争が済んだ昭和二十年の秋から、母校で教鞭をとることになったが、敗戦後の混乱した世情のために、やはりおめにかゝることはなかった。先生がお亡くなりになったのは昭和二十四年であったが、あるいはこのまゝでは御声咳に接することは出来なかったのかもしれない。しかし、不思議な縁で、先生のお孫の一人と私が結婚することになったので、思いがけなくゆっくりとお話をうけたまわったり、お生活にまのあたり接することが出来た。

先生の戦争被害は非常に大きかった。既に昭和十七年に奥さんを亡くされたが、女婿二人を戦死で失い、お嬢さん一人は病死され、また長期療養の方もあった。農地は解放され、また先生の恩給はインフレの波にとり残されて言うに足りない収入になってしまった。それに戦争の影響で当時御家族も十五名の多数になっており、其の食生活は大変であった。人は逆境にあつて始めてその真価を発揮しようというが、先生はこの困難な事態にあつても実に御立派であった。他人にあつく、御自分にうすく、つねに家族の中心として光ある存在であられたことは、まことに印象的であった。農耕はかねがねお好きであったとのことであるが、早朝から熱心に作物の手入れをして居られ、私の朝の挨拶に対し、礼儀正しく御挨拶を返されたお姿が、いまま眼底に焼きついてゐる。

当時は老荘に傾倒して居られるとのことであつた。その頃いたゞいた書にも「虚往実帰」と老子の言葉がかゝれてある。御逝去の少し前の和歌に

大利根の瀬音もすみて朝まだき霽紫に赤城嶺のうく

というのがあるが、先生の御心情がよくうつされていと思う。先生は群馬に移られても上田の学校のことはいつも気にして居られた。また学会誌に私の小論文なども見出され、非常に喜んで居られたと人づてにうけたまわつて恐縮したこともある。

私は上京のたびごとに、車窓から上州の山々をみるのがたのしみである。上州の山は信州の山とはずいぶん感じがちがう。とくに榛名山は峯がいくつもあつて、どれが頂上かちよつとわからない。しかしどこか品があつて上州の野と美しく調和している。この山をみると、榛嶺先主のことがいつも思い出されてくるのである。凡に徹すれば徹するほど底光を放っていた先生のこと……先生は漢籍による教養の一典型ではなかるうか。私は先生におめにかゝれたことをまことに幸福だと思つてゐる。

(信州大学繊維学部教授 農学博士)

先生の想像と実像

(昭、二一、糸) 米山達雄

私が上田へ入学したときは、二代目校長として井上先生が在任せられ、初代校長針塚先生と言えば、本館前の銅像や上級生より

示されるお写真などによって、その面影を偲ぶはかなかった。しかし先生が引退せられて間もない頃であったから、校内には有形無形に針塚イズムは横溢していた様に思う。教授や上級生の口を通して、針塚先生に関する各種の教訓や挿話をきかされたことはしばしばあったし、「進んで難局に当れ」とか「質実剛健」とかの言葉も、先生と関連付けられて耳に親しかった。

かくして当時の私に得られた先生の人物像は、その正三位勲一等なる御身分と相俟って、「厳然として近付きがたいえらい人」であった。そして当時の海軍兵学校の生徒が東郷元師に対する気持も多分こんなものであらうと思ったりした。ともかく先生は偶像的存在であって、正直な処尊敬というより崇敬の対象としてしか考えられなかったのである。

ところが約一年後私は全く思いかけぬ形で先生にお目にかゝる機会に恵まれ、私はじかに先生の高邁な人格、博識にはもとより、実にその人間的な温かさに触れた思いで、その日から私の頭に、今まで画いてきた想像、つまり偶像としての針塚先生は消えて、人間的に親しみの感じられる尊敬敬慕すべき針塚先生が入れ代ったのである。しかも私が先生にお目にかかったその機会は、最初にして最後となつてしまった。今から十九年前の夏のその日のことは、強い印象として今でもはっきりと思い出すことができる。

今回、先生の追想文集発刊に際し、たまたま先輩上司の御奨めもあったので敢えてつたないペンをとって当時を回想してみることにした。

昭和十七年夏私は校外実習生として前橋市にある組合製糸群馬社へ派遣された。六月から七月にかけての、四〇日間の実習期間も余すところ数日に迫った期間中最後の公休日のことであつた。懷中もさみしくなつていたし、休日といつても大したプランもなく、午後になって啄木の心境よろしく、何となく汽車にのりとなり、駅へ出て運賃表をみているうちに、ふつと渋川が眼にとまり、同時に針塚先生の御郷里が渋川在であることに思い付いた。

「母校の卒業生の寄贈になるという先生のお宅を遠くからでも拝見しながらの郊外散歩」が即刻組立てられたプランとなり、とりあえず、八木原へ出てみることにした。当時の八木原駅前は人家が五、六軒あつた様に記憶するが、一軒の雜貨店に入り「上田蚕專の校長を長いことしておられた針塚長太郎先生の御宅の所在地」を尋ねたところ、相当歩かなくてはならぬと知らされた。暑いさ中だったが散歩が目的の私には平氣だった。上衣をぬいで教えられた方向へ歩みはじめた。（あの頃は真夏だったのに制服の上衣もきちんと着用していたつ。最近の風俗から考えると不思議な気がする）十歩も歩まぬうちに私は後ろから、モシモシの聲に呼止められた。ふりかえつてみると、今出て来たばかりの雜貨店で買物をしていた見知らぬ婦人であつた。モンペ姿で白髪が多く交っているが、品のよい中年過ぎのその女性には、けげん顔の私の前に近付き、ニコニコしながら、「私は針塚長太郎の妹で御座います」と名乗った。アッけにとられている私に、「同じ方向ですから一緒に参りましょう。兄も暇ですからどんなにか喜びましょう。私

が兄の家まで御案内します」と言つてズンズン歩き出した。あわてかえつた私は、つられて歩きながら、「私は未だ一度も先生にはお目にかかつたことがないこと、私、ことき風来の一生徒が突然に先生をお訪ねするなどは失礼千万な沙汰であり、今日の私の目的は先生の御郷里そのものの探訪かたがたの散歩である」旨を言いはじめると、婦人は皆まで言わず、「ここまで来て何をおっしゃる。まあまあ是非訪ねてやつて下さい。兄も喜びますから」と言つて笑いながら、「私の家はこゝから兄の家との中間ですから、この荷物をおいてすぐ御案内かたがた用事もありますし私も参ります」と申され、さつさと私を促して前進するのであった。

「これはえらいことになった」と困惑したが、遂に決心して先生の妹様なるその婦人の言われるままに従うことにした。

先生の御宅へ着くまでの間、妹様は少年時代の兄について、「こわいけれど優しい人」と言う言葉で評されたりした。

やがて田舎には珍らしいハイカラな白木の建物が見えて来た。想像されたとおりそれが先生の御住居であった。玄關前に立つて制服の襟を正して息を呑む私に、妹様は「氣楽に、氣楽に」と笑つて先に入り奥に消えた。一瞬緊張の私の前にやがて「ヤーー上り給え、妹から今きいた。よく来てくれた」の声と共に針塚先生その人が現われた。その磊落な調子に幾分ホッとすると同時に、私は顔から汗が吹き出るのをどうしようもなかった。しかしやがて私は先生の寛いだ調子の、幾つかの質問やお話をきいている内に、不思議な様に緊張がとけて次第に氣楽になることが出来た。

先生が先に何かの話題を出されて私が、御答えすると、さらに先生が註釈や意見を加えられるという具合であった。まず私の実習先の群馬社に關連して組合製糸論をくさり述べられた後、ふつと話題を転じて「時に母校の近況はどうだ」との御質問に、私が折からの全国高専柔道大会に、優勝候補随一としての、出場中の柔道部のことをお話した處、先生はうなずかれてから御自身の柔道歴についてお話があり、非常に興味深いものであった。先生は学生時代に草分期の講道館に入門されて、後に著名になった柔道家達（先生はバラバラと四、五名の名前を挙げられたがそれらは三船氏をはじめ何れも当時の有名な柔道家たちであった）と同輩として励まれたこと、講道館長嘉納治五郎氏のこと、その当時の講道館が八畳間一室であったこと、どんなに投げられても絶対に立って、まるで猫のようだった同輩の某弟子のことなど。更に柔道をやつておいたことが、大学卒業後北海道開拓使として道内の各地を視察された時に大いに役立ったこと、つまり当時鉄道もない広漠たる原野を行くには、馬による他なかったが、道なき原野を馬で疾駆して行く時、大きな木の切株に驚いて馬が棒立ちになるそのひょうしに、ステーンと投げ出されることがしばしばだったが、柔道の心得が役立って少しも怪我などしなかったというのであった。更に当時の北海道の原始的景觀、開拓時代の模様、札幌の都市建設の挿話、道開發企画者先人達の雄大な構想等について言及されたが、私は先生のお話の面白さと話術の妙に思わず知らず惹き入れられて、折からの曇さなど全然感ぜられなかった。

私は一人できくのはもったいないような気持ちできき入った。先生の話は非常に熱情のもった調子でなおもつゞく。

話題が北海道のビールからミュンヘンビール、そしてドイツへ。十七世紀フレデリック大王時代にドイツ蚕糸業が創始されたこと、フランスの蚕糸業はそれよりはるかに古く、十四世紀の第一回十字軍遠征と深い関係のあること等、話題はつぎつぎに展開して尽きず、しかも蚕糸以外の事柄でも、それぞれの専門家の話をきく様な感じである。ビールの話、フランスの葡萄酒の話、あるいはライン河畔ローレライの伝説のこと、ヘルマン・ヘッセのこと――

私は先生の熱のこもった話ぶり、興味津々の豊富な話の内容にすっかり魅了されると同時に、飄然と来訪した一介の学徒にすぎない私に対して示して下さる御厚意に感激せずには居られなかった。

夏の日はいつしか西に傾き涼風の立ちこめる時間になっている事に気がつき、辞去の御挨拶をしたところ、「そうか」とうなずいて立ち上られ「少し待ち給え、君は八木原から来たそうだが渋川へ出る方ははるかに近いから、私が駅まで送ってやろう」と事もなげにおっしゃられるのである。おどろいて辞退している私をおいたまゝ一旦奥へ入られ、私が玄關口で靴をはき終った時には、つばの広い麦藁帽子をかむって外で待っていて下さった。恐縮していたみ入っている私にはかまわず、御住居を見廻しながら「卒業生が私に贈物にくれるというんでね」と莞爾とされるのであった。

最早私も先生の御厚意に甘えて渋川までの道を一緒につれて行っていただくことにした。先に立って歩かれる先生は時々ふりかえって気さくに話かけられるのであった。道路端の畳三畳敷程の巨石の傍では「子供の時分によくこれに上ってね」などと。野良帰りの農夫が先生にいんぎんに会釈して過ぎて行く。先生の麦藁帽子にトンボが止って西陽にキラキラと光る。スラリとした先生の後姿、ガッシリとした肩、そこには老いた感じは全然なく、まだ／＼壮年のそれであった。

私はその時、ポケットに小型の安物のカメラが入っており、今日の記念に是非先生に一枚撮らせていたゞきたい気持ちが、さっきからしきりにしていた。そしてその時のゆかたに麦藁帽子の村夫子然の先生の姿こそ、本当によき記念題材と考えて、「お願いします」と口許まで出かゝりながら、余りにももったいない様になって無様の様に思われて、ついにお願ひ出来かねてしまった。私は今になって本当に残念でならない。恐らく先生は気軽に「よし」と言っただけで下さっただろうに。私は感謝と感激でぼうっとしていた様である。やがて渋川駅の改札口のみえる処まで来られた時「では元気でやり給え」と一言、私のお礼の言葉に軽くうなずかれてからクルリとくびすを返して帰路に付かれた。先生の後姿が視界から消えて汽車のくるまでの時間も、汽車の中での時間も、私はつい先程までの先生の事しか考えられなかった。冷厳な偶像はすっかり影を消して、慈愛温容の先生の顔が夜床についても眼に浮かんた。

実習を終えて郷里に帰り先生に礼状を差上げたら早速に御返事を下さりまたまた私は驚かされたのである。

太平洋戦争が苛烈の度を加え、学窓から戦線へ、そして敗戦・復員と眼まぐるしく世は変転し、私はついにその後再び先生をお訪ねする様な機会もなく、結局昭和十七年夏の御拝眉の機会が最初にして最後となった。

その後昭和二十二、三年頃だったと思うが、私は奉職先の職場の最上司であり、同窓の大先輩であったK氏から時折先生の近況のお話を伺ったことがある。そしてその都度K氏は必々と、「あんなに多くの人々から敬慕される人も珍しい」と言われたものであった。私もその言葉に心から賛同したのである。

つたないけれどもここに一片の回想記をものして、今私は幾分なりとも亡き先生の御厚意に報いることが出来たように思えて嬉しい。

(農林省蚕糸試験場技官)

若者の皮膚に触れる御教育

(旧姓鈴木)

(昭、二三、蚕) 権田 昭 一郎

昭和二十三年秋、来る日も来る日も空はあくまでも澄み渡り、

校庭から、桑園から、日々仰ぐ烏帽子と天空との境界には雲一つ見られず、常田ヶ丘は一面の紅葉に白いスキの穂がなびき、大正山の樹文字がくっきりと浮かんで見える頃だった。私達修己寮の悪童達はこの勉学に最適の秋、どうしたとやら、みずずかる信濃路の快い秋風に誘われてか、長いわらじを履こうとの相談が期せずして纏まり、即ち高橋威(蚕三五) 高橋清司(紡二七)、中村賢一(紡二七)それに小生、何とて目的もなく、無謀にも唯ブラリと瓢簞旅行に出発した。戦後食糧事情最悪の時代ではあったが、修己寮の小平オッシュヤンの御親切で、大豆入りのニギリメシを最大限に造って戴き、先ずは手近かな群馬が郷里の高橋威(オンマ)の居を初日の宿と決め、碓氷峠を越えて信越線高崎駅から何かしら道路上を走る小さな軌道(東武鉄道)に乗り替え、ガタゴトと大分の時間を費して渋川に着いた。榛名の山が美しく、幼い頃教科書で習った「上毛の三山」なる名文を思い起こさせる絶景ではあった。伊香保行の木炭バスが水蒸気の多い白い煙をはいていた。一行はそこからオンマの住居群馬郡相馬村大字広馬場と云う馬ばかりよくも揃ったものよと感心させられる名前の里へ向かって歩いた。やはり天高く馬肥ゆる絶好の秋日和であった。歌い、語り、歩み、戯れを連続して行く中に、オンマの観智でこの渋川にお住まいと予ねてよりおききして居た未だ拝せざる大人針塚先生に拝謁の栄を賜わらんと言うことになった。私達は昭和二十年入学なので、当時の校長先生は二代井上柳梧先生であり、三年生の時に三代伊藤武雄先生に代わられた。従って針塚先生に就いては、本館前の御

銅像の礎石とも縁はなく、音に聞く針塚賞なるものの存在くらいなもので、唯修己寮読書室の押入れの中に保管されて居た歴代の全寮写真で、カイゼル髭に大礼服姿の立派な御影だけを、存じ上げて居た程度であつた。オンマの案内で歩く中に赤い屋根だつたと思う先生のお宅が見えて来た。途端何かギューチャン（清司）もケンチャン（賢一）小生も足の進みが鈍くなった。オンマは先に御目通りした事があるとかで若干落着いていた。でも乗りかかった船よと度胸をきめて、オンマの先達に従つて遂にお宅の門を入つた。初めて拝した先生は畑でサツマイモの収穫作業をしておられた。私達はしらずしらずとお近くに進み、無暗に最敬礼を連発した。先生は算の清水で手を洗われ、腰の手拭でその手をふき乍ら、本当にこやかなお顔で悪童共を立派な応接室にお通し下され、且つ自ら茶菓の接待を賜わつた上、学校の近況をお聞きになり、オンマが主に御答え申し上げると、度々深く深く頷かれ、その後で若者の生き方について静かに尊い御教訓を一時間余賜わつた。そのお話の内容は誠に申しわけないことであるが一向思い出せないが、唯終始有難かつたことと、先生の温情溢るる御容姿とお音声とは十数年の時間を経た今日もなおその時のままに脳裏にしっかりと焼きついている。今青年期の若者を教える立場にあつて、私は時にふれ折にふれて思う、若者の指導は理屈ではなくあの日の先生の前に座した自分の様に、若者に皮膚で感ずるものであることを。暮れかけた上州の秋、私達は御前を辞してオンマが里に向つた。先生は再び落煙に立たれ雑木林越しに私達の見えなくなるまで唯

黙つてお見送り下さつた。私達は何度となく手を振りその後は長い道を四人共黙つて歩いた。一人一人の胸に一人一人の決する処があつた様に思う。そして今になつて今の立場から私は痛感する。これが本当の教育と名づけ得るものかなと。その時次の様な御書を賜わり、今もお書斎の壁に家宝としてかかつて居る。私の教師への道の出発点となつた針塚先生ありし日の一齣を、思うがままに書いて見た次第である。

無為老庵堂賀 況是邦家途坎珂
唯頼諸君再造功 俟看天日暗雲破

（愛知県新城高校教諭）